

追悼

大西明さんを偲んで

北沢 正清

京都大学基礎物理学研究所

京都大学基礎物理学研究所前教授の大西明先生は、2023年5月16日に58歳という若さでご逝去されました。本稿では、大西さんが亡くなる前の最後の半年ほどの期間について、記憶を思い起こしてみます。

「すい臓がんステージ4。切除手術不能。」

久しぶりに会った大西さんの口からその言葉を聞いたときのことは、当分忘れられそうにありません。2023年3月下旬、僕のオフィスで二人、日没も過ぎた頃のことでした。それまで、腹部の不調を訴えつつも常にエネルギーッシュで多忙を極めていた大西さんが、3月上旬以降、らしからぬ長期休暇に入った頃から、悪い予感と覚悟はしていました。それでも、この余りにも残酷な病名を自ら告げる大西さんを前に、僕はただ両手で顔を覆う以外にしばらく何もできませんでした。

大西さんは、1992年に京都大学で博士号を取得後、1993年に北海道大学、2008年からは京都大学基礎物理学研究所で教鞭を執られ、原子核理論を中心とした幅広い研究分野で顕著な業績を挙げたほか、後進の育成に尽力されました。2023年5月16日に亡くなった際は享年58歳、その直前まで原子核理論分野の要として研究を含む諸活動で分野を牽引し、アクティブに活躍されていたので、突然の訃報に多くの方が驚き、また深い悲しみと喪失感を味わったことと思います。

このたび、原子核研究に大西さんの追悼記事を書く機会を頂きました。しかし、ご逝去後に追悼文集が刊行されており[1]、大西さんの生前の研究教育業績や人となりは、すでに多くの方々の視点で綴られています。そこで、いろいろ考えた末に、本稿は同じ研究室で大西さんの最期を間近で見ていた者の視点から、当時のことを振り返る場とさせて頂くことにしました。あまりにも突然だった訃報の裏で、大西さんが何を望み、何が起こっていたのかをお伝えできればと思います。

病名確定まで

僕が阪大から基研に異動したのが2022年8月でしたが、その頃から大西さんは胃腸の調子が上向かないとしばしば口にするようになっていました。10月頃だったと思いますが、病院でピロリ菌が原因と診断され、殺菌薬を飲んだのもう大丈夫と仰っていたのを覚えています。後から振り返ればこの頃からすい臓がんの自覚症状が始まっていたわけで、この検査でがんが見つから

なかったことが悔やまれます。ただ、後にご本人から聞いた話だと、仮にこの時点で発見されていても手遅れだったようです。実際、この頃から大西さんはみるみる痩せて、周囲を心配させていました。2022年12月に、僕はコロナを発症したため研究室セミナーにオンラインで参加したことがありましたが、そのときセミナー室全景を写すカメラの映像越しに見た大西さんのシルエットが誰なのか全く分からず、驚いたことを覚えています。

もともと、そのような状況でもご本人は仕事の手を緩めることなく、精力的な活動を続けていました。当時はコロナ禍が解消に向かい人々が恐る恐る移動を再開し出した時期でしたが、大西さんは僕が基研に異動した頃には既に国内外の出張で多忙でした。所の記録を辿ると、2022年の秋以降だけでも、韓国(9/27-10/1)、アメリカ(12/4-11)、イタリア(2023/1/21-29)と3回海外に飛んでいます。せっかく基研に着任したのに、大西さんと議論する時間がなかなか取れなかったことを覚えています。ただ、年の瀬も迫る2022年の12月27日あたりに、ふと着想した研究のアイデアに興奮して大西さんのオフィスに押しかけたところ、そこから2日間にわたって議論に付き合ってもらったことがありました。今から振り返れば貴重な思い出です。

そんな状況が、2023年の2月に入っても続いていました。2023年以降だけでも、大西さんは上記のイタリア出張のほかに研究講演を3回行った記録があります。また、この時期のメールを見返すと、以前に共同研究を行ったJim Lattimer氏が夏に基研を訪問することが決まり、楽しみにしている様子などが伺えます。

しかし一方で、大西さんの体調不良が着実に進行していることは周りから見ても明らかでした。2月に入った頃から、やはり再検査をせねばとよく口にするようになり、記憶が定かではありませんが、検査入院が実現して有給休暇を取られたのは2月中・下旬頃だったと思います。3月に入り、当時基研を長期訪問していたGianluca Colo氏が帰国するというので、送別会が3月3日に開催された記録が僕の予定表に残っています。基研のホストとしてこの会に参加した大西さんは、ソフトドリンクで乾杯して30分くらいで退席されました。このとき既に検査結果が出ていたのかもしれませんが、僕にはいつも通りの大西さんに見えました。

病名確定から

この送別会あたりを境に、急に大西さんを見かけなくなります。大西さんの元気な声が基研に響かなくなり、心配で気を揉んだことをよく覚えています。そうこうするうちに3月10日、研究室のメーリングリスト宛に大西さんから、「(略)しばらくの間、在宅勤務(中略)とさせていただきます。(中略)いくつかの検査の結果、病名が確定し、来週から本格的な闘病となります。(略)」といった内容の短いメールが届きました。

その後しばらくして、おそらく3月20日の夜、本記事冒頭のシーンが始まります。お体はいかがですかと尋ねる僕に、一瞬ニヤッとしてから「本当に病名を聞く勇氣ありますか？」と聞き返してきた大西さんは、こんなときまでお茶目でした。闘病のために新年度から始まる大学院講義の担当を交代してほしいと申し訳なさそうに依頼され、もちろんですと即答しました。その日帰宅してからは、インターネット上のすい臓がんの情報を探す手が止まりませんでした。

僕の認識が正しければ、このとき大西さんが自身の病名を伝えたのは、研究室の同僚スタッフ

だった僕と谷崎さんだけでした。そのほか、青木所長とプログラマネージャの藤田さんには伝えたと本人から聞きましたが、物理業界で生前に大西さんが末期がんであることを知っていたのは、仕事の都合上どうしても伝える必要があると判断したこの4人だけだったと僕は想像しています。（がんであることは、何人かの近しい研究者に話していたようです。）大西さんは、ご自身の病名を人に知られることを良しとせず、最期までそれを貫いたので、我々もその意思を尊重しました。当時、多くの方から大西さんを気遣う連絡を頂きましたが、このような理由で詳しい事情をお伝えできなかったことは、心苦しく思っております。

その後、大西さんは4月上旬までは何度か出勤され、会話する機会もありました。オンラインの共同研究ミーティング等での同席も何度かありました。3月14日にはワークショップ 3rd J-PARC HEF-ex [2]で講演を行い、3月21-24日に開催された物理学会春季大会（オンライン開催）でも平時と変わらない様子で座長を務めておられました。このときカメラに映るやつれた姿に驚いた何名かの方から、学会後に心配の問い合わせがありました。オンライン会議は僕以外の人々とも頻繁に行っていると耳にしていたので、この頃の僕は大西さんの病状は思ったより良好なのではと思い始めていました。4月初旬に、京大物理教室に新規着任された土居さんが基研を挨拶訪問され、ちょうど大西さんと谷崎さんも在席中だったので、4階のお茶部屋でしばし4人で歓談しました。このときの大西さんは、10月のハワイ学会に行くのが楽しみだとしきりに言っていたことを記憶しています。僕はこの言葉を真に受けて、回復の見込みがあるのだろうと期待してしまいましたが、後にご遺族に伺ったところではこの頃には既に病状は絶望的で、闘病による体力低下も著しかったそうなので、最後の力を振り絞って会話をされていたようです。その後、またしばらく大西さんを見かけなくなります。

4月20日だったと思いますが、この週に基研を訪問していた Di-Lun Yang 氏と昼食に行った帰りに、基研の玄関ロビーで車椅子に乗って帰宅しようとする大西さんに出会いました。大西さんにとっては、予期せぬ対面だったのだと思います。力のないかすれた声で振り絞るように一言、「迷惑かけます、よろしく。」とだけ言って、身を隠すように去っていきました。その弱々しい姿に、僕は咄嗟にかける言葉を見つけられず、無言で頭を下げるのが精一杯でした。大西さんの病気のことを知らなかった Di-Lun が狼狽するのを見て、病状の深刻さを再認識しました。これが、僕が最後に大西さんに直接会った機会でおそらく最後の出勤日だったのだろうと思います。4月29,30日に筑波大学で開催された研究会[3]で、大西さんと最も多く共著論文を書いた奈良さんに会ったので、そろそろ覚悟が必要かもしれないとこっそり伝えました。

5月に入っても、大西さんのオンライン活動は続きました。亡くなる前日の5月15日に開催された基研所員会議にはオンラインで出席し、終盤に発言もされていました。また、僕が知っているだけでも、最後の1週間の間にもう2つ、オンラインミーティングを行っています。この頃の僕は、最後に見た大西さんの姿と、周りから伝え聞くオンライン上でのアクティビティのギャップに戸惑いながら、後者から想像できる回復の可能性に望みを託していました。それゆえに、16日早朝に訃報を受けたときは、とても信じられないというのが率直な感想でした。

このように、大西さんは決して自分の病気を言い訳にしない意思を貫徹され、平静を装ったまま最後の最後まで普段通りの物理学者であろうとし続けられました。ご逝去後にご遺族から伺っ

たところでは、闘病の苦しみは壮絶だったようです。しかし、末期がんであることを事前に知っていたのにそれを聞いて驚いた僕を含め、周囲にはそんな様子を微塵も感じさせませんでした。基研発行の訃報記事を執筆した際に、「まさに現役の物理学者として、机の上でペンを握ったまま」亡くなったと書いたら公表記事では没になりましたが、僕にとってはこれが当時思いつく限り最良の表現であり、言葉遣いが適切か分かりませんが、偉大で見事な逝き方でした。他人から見れば、もっと弱みを見せてくれて構わなかったと思いますし、事前に打ち明けてもらえれば何かできたかもしれないと思う方もおられることと思います。しかし、そうしないことが大西さんの美学であり、その高潔な人生哲学を自らの生涯の最後をもってお示しになった大西さんに最大限の敬意を表し、ご冥福をお祈りしたいと思います。

その後のこと

5月19,20日に開催された大西さんの通夜・告別式には、とても多くの方が参列されました。近年大規模な葬儀の機会が減りつつあると聞きますが、故人に別れを告げ、残された者同士が故人を偲ぶ場として大変貴重だったと、一参加者として思います。訃報から数日後だったにも関わらず、世界中から多数の追悼メッセージが寄せられたことも印象的でした。

2023年7月に、大西さんゆかりの方々に基研に集まって頂き、オフィスに残された遺品の引き取りなどを行いました。この場には大西さんの奥様にもご参加いただき、しばし故人を偲び、気持ちを整理する機会となりました。大西さんが亡くなった直後から、研究会や文集で大西さんを追悼する機会を持ちたいという声が聞こえていたので、この場でそれについての相談が行われ、追悼研究会・偲ぶ会の開催と追悼文集の編纂が決まったのも自然な成り行きでした。前者は2024年3月に開催され、80名を超える方々にお集まり頂いたほか[4]、追悼文集には約60名という多くの方々からの寄稿がありました。文集は印刷製本版一部をご遺族にお渡ししたほか、電子版が雑誌・素粒子論研究から出版されました[1]。

これらの企画を行うにあたり、多くの方々に支えて頂いたことをこの場を借りてお礼申し上げます。特に谷崎さんをはじめとした同僚の皆さんと、北大時代のお弟子さんである石塚さん、一瀬さんにご尽力頂いたことを記録します。その過程で、石塚さん一瀬さんを含む、北大の加藤・大西体制時代の原子核理論研究室OB/OGの団結力に羨望すると共に、そのような一時代を作り上げた加藤さんと大西さんの指導力に感じ入りました。京大物理教室の菅沼さんは、この時期ご遺族と物理業界の連絡窓口、また相談役として奔走し、無二の働きをされていました。なお、追悼文集の電子出版が遅れ2025年にずれ込んだことは、ひとえに僕北沢の責任ですので、ご寄稿頂いた方々を含む関係者の皆様に心よりお詫び申し上げます。

大西さんを偲ぶ声は大きく、上記以外にも国内外の研究会で何度も追悼セッションが組まれたことも記しておきます。僕が参加しただけでも、熱場の量子論とその応用2023、大西さんが参加を夢見た2023年11月のハワイ学会、2024年10月開催のCSQCD2024研究会が挙げられます。数が多すぎて紹介しきれませんが、葬儀の弔辞にはじまり、様々な場で語られた追悼の言葉にはそれぞれ大西さんへの想いが込められており、いま思い出しても目頭が熱くなるものばかりです。

以上、当時の記憶を辿って指を走らせてみました。読者の皆さんにとって在りし日の大西さんをしばし思い出す契機になれば幸いです。最後に、本稿は僕北沢の記憶に基づくものですので、内容に不正確だったり、解釈に誤りのある箇所があるかもしれませんが、その場合はどうぞご容赦ください。大西さんのご冥福を心よりお祈りいたします。

参考文献

- [1] 素粒子論研究・電子版 Vol. 44 (2025) No. 2.
- [2] <https://kds.kek.jp/event/44086/>
- [3] <https://conference-indico.kek.jp/event/205/>
- [4] <https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~ohnishi-memorial/>